

# 沖繩陸軍特攻における「生」への一考察

— 福岡・振武寮の問題を中心に —

加藤 拓

キーワード

太平洋戦争 陸軍航空 特攻隊 沖繩戦 振武寮

はじめに

特攻に関しては、従来の研究で一定の見解が示されてきたものの、一般には各々の立場によってその見方が極端に異なっているのではないかというのが、私なりの考えである。とりわけ、戦死者の死への解釈は英霊、無駄死にと乖離しているように見受けられる。そこで、本稿では、従来のように遺書など戦死者の存在でなく、生き残った特攻隊員たちの存在に焦点を当てていこうと思う。一括りに「生き残り特攻隊員」といつても、未出撃のまま待機中に終戦を迎えた「待機者」と、出撃しながら生きて戻ってきた「帰

還者」の二通りのタイプが存在するが、ここでは出撃経験からより戦死者に近い体験をしたと考えられる帰還特攻隊員の存在を取り上げた<sup>1)</sup>。また、本稿では帰還特攻隊員たちの隔離所であったという福岡・振武寮の話を中心としたが、この振武寮に関する研究は少なく、とりわけ様々な立場から分析されたようなものは現在のところ確認できていない。よって、帰還特攻隊員たちや司令部側、さらに第三者の視点を取り上げるに至った。

さて、本論に入る前に、これまでの特攻観に関する現在までの概要を述べていきたい。太平洋戦争中は「軍神」とまで言われていた特攻隊員たちも、敗戦となるやその名譽

は地に落ちた。「特攻くずれ」などという言葉はその最たる例であろうし、志賀直哉が「特攻隊の如き変態的な教育をほどこし、終戦と共に復員し、何ら善後処置をとらないのは無責任極まる事で、それが社会に如何なる悪影響を及ぼすか深く考ふべきだと思ふ」などと述べていたのもそうした一環であったように考えられる。やがて一九五〇年代あたりからは軍指導者の中に特攻作戦そのものを正当化し、「特攻は志願によるもので、隊員は皆立派に出撃していった」と戦死者を美化していく者が現れるようになった。これらは彼らが自分たちの責任をカモフラージュする目的があつたのではないかと考えられ、こうした姿勢は一九六〇年代後半から七〇年代にかけて防衛庁防衛研修所戦史室で発刊された『戦史叢書』にも表れてくる。また、当時同室に勤務していた生田惇元大尉（航士五五期）が著した『陸軍航空特別攻撃隊史』（ビジネス社、一九七七年）でも同調したような箇所が何点か見受けられることから、本来は客観性が重視されるはずの歴史書にかなり制約がかかっていったという点は指摘できる。<sup>4</sup>

このような状況にあつて、主に特攻隊員側から特攻の実態に鋭く迫つていったのは元陸軍報道班員高木俊朗である。彼は関係者を一人一人あたっていき、その証言を一つ一つまとめていくという作業を繰り返していった。そんな

地道な努力の結果、高木は『知覧』（朝日新聞社、一九六五年）と『陸軍特別攻撃隊』（文藝春秋、一九七四年）という二つの作品を世に送り出すことになる。前者は沖繩、後者はフィリピンの陸軍特攻についてそれぞれ書かれたものであり、これらは一人一人の特攻隊員の存在に焦点を当て、その個人個人がどのように生きたかを多くの読者に伝えるものであつた。まだ軍首脳部たちの影響力が残つていた時代から堂々と軍上層部側を批判していたという点で彼の功績は高く評価されて然りであると思う。また、彼はこれらの著書の中でそれぞれの証言から歴史を構成していくという手法を取っているが、このやり方は後にオーラル・ヒストリーとして歴史学の中に新たな研究方法を確立していった。よつて、これらは特攻隊における記述の転換点となつたように考えられるのである。

こうした高木の努力によつて特攻の一面が明らかにされていくと、今度は歴史研究の世界においても特攻について取り上げられるようになった。初期段階のものとしては、日米両国の史料から特攻隊の戦果を独自の方法で分析した小沢郁郎『つらい真実』（同成社、一九八三年）の存在が挙げられる。これは特攻隊員たちの戦いぶりについて一定の評価を与えつつも、非人間性という面から彼らを送り出した軍指導者や作戦に対し否定的な見解を示すという姿勢

はこの後の多くの研究の根幹部分をなしていくこととなった。このような動きは、それまで沈黙を続けてきた生き残り特攻隊員たちにも少なからず影響を与えていったように考えられる。自らが特攻隊員であったことを隠してきた者の中には周囲に自らの過去を明かし、講演や執筆などによって次の世代に歴史を伝えていこうという者が多くいたようだ。

こうした流れは旧軍関係者側にも波及する。例えば、第六航空軍司令官菅原道大中将（陸士二一期）の次男深堀道義（海兵七五期）は『特攻の真実』の中で日本古来の伝統から陸海軍別の分析を行い、そこから特攻の本質を導き出している。この中で深堀は、特攻作戦の批判は当然であり、実父についても自決すべきであったという批判的な見方をしている。このように、旧軍関係者側が特攻についてかなり客観的に触れられるようになったという点で、深堀の研究は非常に画期的かつ意義深いものではないかと考えられる。ここにおいて、特攻隊に関する研究ではある程度見解が一致してきており、最近ではそれらをもとに各部分に焦点を絞った研究も行われてきた。

## 第一章 福岡・振武寮

陸軍の航空部隊では一九四四（昭和一九）年一月二六日新たに作戦専任の第六航空軍が創設され、当初東京に置かれていた司令部は沖繩作戦直前の翌年三月一〇日に福岡へ移った。この時筑紫高等学校（現・福岡県立筑紫中央高等学校）を接収した軍は、一七日に福岡女学院も徴用し、そこに無縁傍受隊を置いた。その後、五月六日に第六航空軍司令部が福岡高等学校（現・福岡県立福岡中央高等学校）に移転した際、振武寮という施設が福岡女学院の中に設立されたと考えられる。この中では収容された帰還特攻隊員たちが参謀から罵倒されたり、軍人勅諭の書き写しや暗記を命じられたり、精神訓話を聞かされたりしたという。軍側は「とにかく死ぬ」と隊員たちを精神的に追いつめたため、中にはこの屈辱に耐えられずに自決したり、精神に支障をきたしたりしたものもいたようだ。その後、どうやら六月一九日夜の福岡大空襲によって振武寮は半焼し、その頃収容されていた隊員の中には第七七振武隊秋村友芳伍長（少飛一四期）のように別の場所へ移された者もいたと考えられる。ただ、残された場所はその後も使用された可能性があり、同じ一九日第六航空軍司令部に出頭して振武寮に泊まったという誠第四一飛行隊長寺山欽造大尉（航士

沖繩陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

五五期)はしばらくそこにそのまま滞在したという。また、振武寮の日直士官だった石川二郎元少尉(特操二期)の記述や証言から七月になっても振武寮が存在していたことも分かる。ただし、七月四日頃第六航空軍司令部に赴いたという誠第四一飛行隊菊田直治軍曹(航養一四期)らによれば、司令部は元の筑紫高等女学校にあったことになっており、この頃の司令部に関しては不明な点も多い<sup>①</sup>。しかしながら、この振武寮で終戦を迎えた者がいたという話もあり、それまで続いていた可能性も十分考えられる。

なお、振武寮という名称自体は他でも使われていたようであり、第一七九振武隊浜田斎伍長(少飛一四期)が両親にあてた手紙の中の「自分の私物品は防府飛行場にありませぬ故受取りに行つて下さい。三田尻駅にて下車振武寮にありません」という記述から、防府飛行場にもあったことが分かる。つまり、振武寮という言葉は単に振武隊の寮、つまり宿泊施設という意味であるようにも考えられ、場合によっては第六航空軍の担当地域であった西日本の各地にあった可能性も否定できないが、以後はこれらのうちの福岡にあったものに言及していくこととする。また、この防府飛行場の振武寮においても特攻隊員たちが実際に虐待を受けていたかというところまでは確認できていないことも付記しておく。

## 第二章 振武寮に関する著述

振武寮について最初に言及したものは高木俊朗『知覧』であるが、その当時それほどクローズアップされることはなく、以後約三〇年間その存在は関係者以外ではそれほど知られることはなかったようだ。しかし、振武寮の存在に触れた映画『月光の夏』が一九九三年に公開されると、その反響もあつて振武寮の名は広く世に知れわたった。映画の中ではそこでの実態をはっきり描かれてはいなかったが、以後振武寮について語った元特攻隊員たちが注目されるようになり、新聞記事や書籍の中でも取り上げられていったのである。よって、以下に振武寮に関して比較的多く触れられている七つの著作物や映画、テレビ番組などを時代順に記していきたい。

(一) 高木俊朗『知覧』(朝日新聞社、一九六五年)／高木俊朗『特攻基地 知覧』(角川文庫、一九七三年)<sup>②</sup>

本書は『週刊朝日』に一九六四年一月一三日から翌六五年七月三〇日まで実に三八回にわたって連載された「知覧」をまとめたものであり、この中では三名の元特攻隊員の証言から振武寮の実態について述べられている。実は、この中では特攻隊員たちを責め立てた参謀といい、後

述するピストル事件といい、すでにその概要が記されており、関係者についてもほとんど明らかになっているのである。しかしながら、当時非常に注目されていた高木の著書の中でなぜか振武寮の存在にはそれほど注目されてこなかったようだ。高木がこの振武寮の存在にそれほど重きを置いてないような印象を受けたことから、このあたりの経緯については謎が多い。

(二) 毛利恒之『月光の夏』(汐文社、一九九三年) / 毛

利恒之『月光の夏』(講談社、一九九五年) / 神山征二郎(監督)・毛利恒之(原作、脚本・企画)『月光の夏』(株式会社仕事、一九九三年)

本作品は事実を元にした話であり、一九九三年に映画化されて全国で上映された。地域の人々の協力もあり、一九九九年には観客数は二一〇万人、上映地は四〇〇〇箇所<sup>5)</sup>に達し、振武寮の存在はこの映画によって広く世に知られていった。物語の概要については以下に述べる。

昭和二〇年五月末鳥栖国民学校(現・佐賀県鳥栖市立鳥栖小学校)に目達原から出撃間近の特攻隊員二人がピアノ・ソナタ「月光」を弾きにやってきた。それから四五五年後に当時のピアノ係がそのピアノを処分する計画に待ったをかけたという話がラジオのドキュメンタリー番組「ピアノは

知っている」(毛利恒之構成、KBC九州朝日放送)で報じられて社会的な反響を呼ぶ。その取材によって二人のうち一人は生存していることが分かったが、その生存者は振武寮でのつらい体験などから当時のことを語るうとはしない。しかし、取材者の説得が続く中、ついに彼は真実を語り、鳥栖小学校までピアノを弾きに行くというものである。

(三) 「振武寮」『西日本新聞』(一九九三年八月一日) 一五日、故・牧甫氏より提供)

映画『月光の夏』が反響を呼んだ一九九三年の八月一日から一五日には、地元福岡を基盤とする同紙において「振武寮」が連載された。ここでは「限られた関係者だけが伝えたその存在を通して、戦争の暗部を改めて問い掛けたい」という趣旨で、元特攻隊員、元参謀、その他関係者と計八名の証言から振武寮の実像に迫っている。また、同紙ではこの後も「歴史の闇に埋もれさせないで」(一九九三年八月一日、故・牧甫氏より提供)や「特攻隊員の悲劇」(一九九三年八月二七日)、「振武寮の屈辱伝えたい」(一九九三年九月五日)などの記事で紹介し続けている点は非常に高く評価できよう。しかし、振武寮に関する研究という観点から見ると、明確な立場を表しているとは言えず、あくまで同紙の位置づけは疑問を呈しているものとし

沖縄陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

なければなるまい。よって、同紙における数々の取材を生かすためにも、今後その一つ一つを分析していく必要があるように思う。

（四）佐藤早苗『特攻の町・知覧』（光人社、一九九七年）本書は『正論』での連載を加筆出版したものである。この中では戦死者よりも帰還特攻隊員たちの存在に焦点を当てており、振武寮に関しても多くの記述がなされている。内容的には元特攻隊員三人と参謀の証言からその実態に迫っているため、隊員側と司令部側の両方の視点を含んでいる。さらに、これらの証言者が特攻に係りていくまでの経緯も多く記されており、その意味では大変貴重なものである。ただ、本書はあくまでそれぞれの語り手の証言や立場に重点を置いて展開されているため、証言どうしの矛盾点を明らかにしていくといった姿勢はとっていない。また、振武寮における女学生の慰問のように挙げられている疑問点も未解決のままである。よって、これらの矛盾点や疑問点をどのように解決していくかといったことが、振武寮の研究をしていくにあたって欠かせないものとなることだろう。

（五）今井健嗣『元気で命中に参ります』（元就出版社、二〇〇四年）

振武寮について今井は、前述のうち「振武寮」『西日本新聞』以外のものを参考にしており、振武寮の「記録がないということ」は、そもそも振武寮は無かったとも言える。そういう意見もある。反対に、あまりにも酷い施設であったが故に、存在はしていたが記録から抹消されたとも受け取れる。一体どちらであろうか。筆者は、振武寮は存在したと考える<sup>⑤</sup>。と自らの意見を述べている。また、生還した全特攻隊員が振武寮に収容されたわけではないという事実からも、今井は「振武寮はある特定の限られた範囲の事柄であった<sup>⑥</sup>」のではないかと推測している。このように今井は研究者としての立場から振武寮の存在と陸軍沖縄航空作戦全体からの位置づけを既刊の文献から分析しているが、その中身についての検証は行っていない。よって、振武寮についてより深い考察をしていく必要があるように考える。

（六）シュミット村木眞寿美『もう、神風は吹かない』（河出書房新社、二〇〇五年）

本書での証言は元特攻隊員二人だけにとどまっているものの、そのうちの一人が当時の第六航空軍の下士官から戦

後に得た軍内部の情報など、それぞれの証言に関して深いところまで記述されており、結果的に振武寮の実態や本質に迫った質の高い著作と言える。ただし、本書では特攻隊員側の証言からしか記されていないという点で、特攻隊員たちを通してしか軍側の姿は見えず、軍側への直視が抑えられてしまっているところは否めない。よって、本書の特攻隊員側からの視点を生かすためにも、本研究ではより軍側の視点に迫ったものにしていきたいと思う。

(七) ETV特集「許されなかった帰還」(NHK教育テレビ、二〇〇六年一〇月二日)

また、NHKによって全国放映された本番組でもノンフィクション作家林えいだいのこれまでの振武寮に対する研究が紹介されていた。この中では現在も生存している振武寮証言者として三人の元特攻隊員が出演しており、亡くなった元参謀の肉声テープや振武寮の写真なども紹介されていた。これによって、振武寮の存在理由や実態、そこで焦点となる問題などがより鮮明にされたように思う。また、参謀側の証言においても、かなり本質的なところまで答えられていたように感じた。なお、本番組は特に地元福岡で反響が大きかったようで、より多くの人が振武寮の存在を知り、戦争や特攻の実態に興味を持つきっかけになったの

ではないかと考える。よって、本論文ではこの番組に関しても大いに参照させてもらうことにした。

### 第三章 特攻隊員側の視点から

上記を踏まえ、ここからは振武寮関係者たちの足取りやその証言を順に見ていきたいと考える。ここでは特攻隊員四名、軍関係者三名、それ以外に第三者の視点も踏まえていくことにする。

(一) 第六五振武隊 片山啓二少尉(特操二期)<sup>⑧</sup>

学徒出陣で東京農業大学から陸軍に入った片山は一九四五年四月の明野飛行師団転属の際、第六五振武隊の隊員となった。老朽機ばかりで手こずりつつ五月七日によりやく最前線の知覧にたどり着くや、第六航空軍兼大本営作戦参謀田中耕二少佐(陸士四五期)から飛ばない飛行機を持つてきたことを怒鳴られ、福岡まで代機を受け取りに行くように命じられた。福岡の第六航空軍司令部で彼らが整列しても、倉澤清忠編成参謀(航士五〇期)は机の上に長靴の足を上げて腕を組み、仰向けにそりかえったまま「貴様たち、なんで帰ってきた」と冷たく言ったという。経緯を説明しても「悪いのは飛行機でなくお前たちの腕だろ」

などと言われ、片山らは「事情も分からずに」と臍を煮えくり返して、無言で耐えるしかなかったようだ。この時司令部に飛行機はなく、彼らは用意できるまで軍用旅館である大盛館で待機することとなった。

そんなある日大盛館で「ピストル事件」が起こり、たまたま投宿していただけの片山らも振武寮に入れられることになった。死んだはずの隊員たちと再会し、みな同一人物とは思えないほど変わり果てていたことに片山は仰天したという。やがて、まもなく寮内でピストル自決した者がいたが、その氏名も理由も発表されなかつたらしい。しかし、これはしのびがたい侮辱や苦痛のためだと考えられ、特攻隊員となって生きていることが不忠不法のように扱われていたようである。その後片山らは「お前たちは既に死んだ者。本土決戦となれば一番に突入してもらう」ということで明野の原隊に戻り、再び特攻訓練を受けるよう指示を受けた。そして、そのまま終戦を迎えたが、生きていてよいのか思い悩むようになったという。

やがて京都府精華町の職員となった片山は、一九六四年秋『週刊朝日』に連載されていた「知覧」を読み、戦死した隊員の遺族の連絡先を教えてもらうために高木俊朗を訪ねた。当初高木は片山が生き残ったと知って驚いたようだが、ここで第六五振武隊の顛末を聞くことにし、この話が

やがて振武寮に関する最初の記述となっていく。また、片山はどうしても納得できないしこりや屈辱の思い出に光を当てさせたいという思いから、何度も福岡へ行き、振武寮跡を訪ねてみたという。そして、何人かの体験者の話も聞き、「特攻編成は形式上志願だったが、実際は命令だった。志願なら引き返すことも許されたはずだが、軍はそれを認めず振武寮に軟禁した。帰還を「命令違反」としたからだ。特攻隊員の名誉より、参謀たちが自分たちの立場を守るためだったとしか思えない」という結論に達した。このような特攻ではあっても、出撃した隊員たちへの思いから、片山は現在も近畿特操会事務局長や昭和の杜友の会評議員として慰霊活動が続けている。

## (二) 第二二振武隊 大貫健一郎少尉(特操一期)

片山と同じく学徒兵で拓殖大学出身の大貫は一九四五年二月に明野で第二二振武隊へ転属、知覧よりさらに前進した喜界島から四月七日沖繩に向けて出撃した。ところが、奄美大島を過ぎ、気持ちの中で一五分後に人生を終えることへの疑問と目的を果たそうという意志が交錯していた時、グラマン四機に急襲されてしまう。機体に無数の大きな穴を開けられたが、眼下にあった徳之島飛行場にかろうじて着陸することができた。その後、空襲によって乗機を



失うと、大貫は当時徳之島にいた他の特攻隊員たちとともに喜界島まで戻ることになった。喜界島には彼らを内地へ移送するために重爆が三度沖繩への物資投下の帰りに立ち寄ったが、最初の二度はいずれも夜間戦闘機に撃墜されている。しかし、五月二八日未明にやって来た最後のものだけは無事筵田飛行場（現・福岡空港）に着き、乗っていた特攻隊員二八名は奇跡的に生還、そのまま第六航空軍司令部に帰還の申告を行った。

ところが、司令部のあった福岡高等女学校の校庭に待たされてやっと現れた倉澤参謀の迎え方は尋常なものではなく、「貴様たちはなぜのめめ帰ってきたのか。出撃の意志がないから帰ったことは明白である。死んだ仲間に恥ずかしくないのか」という耳を疑いたくなるような悪口罵倒をした。彼らは罵倒された後、そのまま軍用旅館である大盛館に連れていかれ、翌日司令部の道一本隔てた裏側にある振武寮に入れられた。そこには二人用で八畳の和室がずらりと並び、すでに二〇人ばかりの先客がいたが、皆「これが特攻隊員か」と思うほど生気のない憔悴しきった顔をしていたという。大貫らは事前に何の説明も受けてなかったため、当初何のためにそこに入れられたのかすら分からなかったようだが、そこでの生活は生き地獄であることが次第に分かってきた。そこでは外出はおろか、手紙などの

外部接触も一切禁止となっていた。

ここでの大貫らの日課は、軍人勅諭や反省文を書くこと、写経、精神修養などであり、その他九州大学の学者による精神訓話、女学生たちの慰問もあったという。また、裁縫室での食事中には参謀たちが「命が惜しくて帰ってきたら。そんなに死ぬのが嫌か、卑怯者。死んだ連中に申し訳ないと思わないのか」と罵りの言葉をかけていったようだ。そんなある日、大貫は出撃名簿を見せてもらいに、第六航空軍司令部の人事係に行った。すると、大貫の所属した第二二振武隊は二人全員に赤で×印がついていて、大貫自身も「任・陸軍大尉」と特攻死した場合の二階級特進がされていたという。つまり、ここからは大貫ら六人の隊員はまだ生きていたにもかかわらず、勝手に特攻死扱いにされていたことが分かる。

やがて、彼らは六月半ばに明野の原隊に戻される際、隊員たちの名譽と特攻全体の士気の問題から「振武寮の件と出撃して生還したことは一切他言を禁ず」と言われたという。そして、三重県山中の菰野飛行場で終戦を迎えたが、すでに戦死者扱いの大貫は結婚するまで戸籍のない状態が続くという難儀を強いられた。その後、彼は建設会社を経営しつつ、特操一期生会の事務局長を務めた。そして、一九八九年『特操一期生史』発刊の際には自らの手記「特

攻涙あり」の中で振武寮での辛い体験を記した。これは、それまで「特攻のことは思い出すのもイヤで、早く忘れてしまいたい」と考えていた大貫にとつて振武寮の存在を明らかにしていく第一歩となつていったと思われる。

そんな大貫には「戦争は絶対にすまい」と誓い、営々と平和を築いてきたという自負があるという。二〇〇六年五月末振武寮跡を訪問した際に「戦争っていうのは必ず命令される下っ端が殺され、上の連中は生き残る。国と国はいつか緊迫した関係になる。その時戦争は嫌だと言うか戦うか。それはあなた方次第ですよ」という言葉を残したのも、若い世代に平和を再確認してほしいという気持ちの表れであるように思う。また、大貫は「あんなものは勇ましいものでも何でもない。我々だつて普通の若者でした。今の若者だつてそういう時になればやむを得ず行くかもしれません」、「戦果が問題でなく、死が目的だつた。戦友たちの死は結局、無駄に終わった」と、特攻における本質的な問題点も指摘してきた。いまだに美化されがちな特攻のイデオロギー的側面を排除して考えられるのは、それだけ彼自身が特攻の本質と向き合つてきたことを如実に表していると言ふことができるのではないだろうか。

(三) 誠第三九飛行隊 牧甫少尉（特操一期）<sup>(29)</sup>

明治大学から学徒として入隊した牧は一九四五年二月に満州で誠第三九飛行隊へ編入され、前進した徳之島から三月三十一日に沖繩へ出撃した。しかし、エンジントラブルによつてやむなく引き返し、途中でグラマンに追われつつも何とか奄美大島沖で不時着、そこから喜界島に渡つた後大貫らと五月二八日に帰還した<sup>(30)</sup>。そして、振武寮に収容されたわけだが、そこで牧は六月一日に再出撃のために飛行機を与えられ、その飛行機で知覧に行つて沖繩に出撃せよという命令を受けた。すると、一緒に戻つてきたある特攻隊長（航士五七期）が「沖繩ではなく、第六航空軍司令部に突っ込んでほしい。俺は菅原軍司令官以下参謀連中を全員一室に集めておくから、そこに突っ込んでくれ。俺も死ぬ」という「謀反計画」を持ちかけたというのである。牧には彼の気持ちに痛いほど分かつたため、同室の大貫に相談することにしたところ、「家族にも累が及ぶかもしれない」ということでどうやら断つたようだ。やがて、牧の出撃は中止となる。

その後、六月半ばに振武寮を出て明野に到着した後、同月末に熊谷の第五二航空師団へ転属、やがて山形の真室川飛行場で終戦を迎えた。終戦後は建設会社へ勤務する一方、知覧の慰霊祭や戦友会などに参加していたようだ。そ

んある日、九州朝日放送の『ピアノは知っている』というラジオのドキュメンタリー番組の取材で牧は作家の毛利恒之と会い、次第に振武寮のことを話すようになっていった。その後も講演活動が続けるなど後世に歴史を伝えようとしていた牧ではあったが、肺ガンのため二〇〇六年一月三一日に八四歳で亡くなった。

#### 第四章 軍関係者側の視点から

(一) 第六航空軍参謀 倉澤清忠少佐(航士五〇期↓陸大五八期)

「振武寮」を語る上で重要なのが倉澤の存在である。彼は陸軍航空士官学校を卒業すると、会寧の飛行第六五戦隊や航空士官学校の教官などを経て陸大に入校、卒業後は銚田に赴いた。しかし、一九四四年九月通信網設置のため徳之島に向かう途中、知覧でプロペラ停止の事故を起こし、頭蓋骨骨折の重傷を負う。その後、何とか奇跡の生還は果たしたものの、左目の視力が落ちてしまい、パイロットは務まらなくなってしまうという。そんな時ちょうど第六航空軍司令部ができ、そこへ配属されることとなった。そして、幕僚たちの中で唯一のパイロット経験者だったことから、飛行機やパイロットを管理すること、特攻隊員の面

倒を見ることなどの雑用が彼の日課となったようである。

彼は「軟禁したというのは解釈の違いだ。神様になっていた特攻隊員の名誉を守るため、彼らのことを思っていて置いたのだから」という立場をとり、振武寮ができた経緯についても「出撃しても戻ってくる隊員がいたためにとりあえず大盛館に収容したが、『ピストル事件』をきっかけに福岡女学院の女子寮に移した」というのである。特攻隊員たちが「民間人と接触して間違いがあつてはということでは振武寮に移させた」というのがその理由らしい。また、「職務上なぜ突入できなかったは聞いたが、『臆病者』と罵つた者はいないと信じている。参謀も同じ人間。一度は死をかけて出撃した者に『命が惜しいか』とは絶対に言えないし、言つてはならない」と振武寮体験者たちの証言を否定しただけでなく、「いざれ本土決戦となれば一億総特攻。その時に備えて精神修養をした施設。昔も今もそう思っている」と振武寮があくまで帰還特攻隊員たちの再教育の場であつたことを強調しているのである。

しかし、佐藤早苗が指摘しているように、この話は実は片山の証言と矛盾する。というのも、前述したように片山はそこで死んだと思つていた仲間たちに再会したと証言しているため、ここから『ピストル事件』当時すでに振武寮は存在していたということになるのである。さらに、倉

澤は西日本新聞の記者に対して「もちろん最初から振武寮ありきじゃない」とその名をはつきりと言いつつ一方、佐藤早苗に対しては振武寮という名前のものは存在しなかったと述べている。ここでは「特攻隊員を収容していたのは『裁縫室』だった。司令部の者はみんなそう呼んでいた」ということだが、同書ではこの裁縫室が食堂になったことが述べられており、この点も矛盾する。ただ、軍が帰還特攻隊員たちへの対応に神経を使っていたということも認めており、「慌てました。毎日新しい特攻隊員が基地を飛び立っているんです。失敗して帰った者がうろろしていたら困りますよ。士気にも関わりますから」と当時の心境を吐露している。

このような倉沢の立場について、士官学校の同期である飛行第一〇三戦隊長東條道明元少佐（陸士五〇期）は「当時の第六航空軍司令部はムチャクチャで、司令官をはじめ参謀たちは、やるべきことがないから朝から酒ばかり飲んでいました。特攻隊員に発破をかけて鍛えなおすことしかやることがなかった。飛行機のことに分かるのは下っ端の倉澤一人。彼が一人でカリカリして、一日中幕僚たちに向かって怒鳴り散らしていた。幕僚たちが倉澤につけたあだ名は『神経露出狂』で、彼はひどい仕事ばかり押しつけられていた」と語っている。ここからは、倉澤もまた辛い立場に置かれ

ていたことが分かる。また、倉澤には「司令部は『死んでもラッパを離さず』という日露戦争の考え方だ。そんな時代遅れの認識では、近代航空戦についていけない」という彼なりの反発もあったようだ。

しかしながら、元特攻隊員たちの証言からは彼が虐待していたことは否めない。実際、牧の証言でも「その頃第六航空軍の参謀で、飛行機に乗れる人が一人だけいた。二度の事故で片目をやられ、酒ばかり飲んでた。ほかの参謀もみんな酒、酒。毎日聞かえてくるのは、酒臭い罵声だった。それで『沖繩には四万五千の米兵がおしかけている。貴様ら三十人が千人乗った船を一隻ずつ撃沈すれば、三万人殺せたのではないか』なんて幼稚でバカなことを言っていた。偵察も護衛もなく状況も気候も何も知らずに飛ばされたら、ピケットラインを越せない。船が見えても、どの船に千人乗っているかなんて分からない。大体当たらない。前線も飛行機も知らないヤツが後ろの方で幼稚な作戦を作っていた。ムチャクチャだ」と他の参謀たちと倉澤がそれほど変わらなかったことが分かる。

ここまでの倉澤の証言には矛盾する点が多く、はぐらかしているような印象も受ける。しかしながら、EIV特集「許されなかった帰還」では、この倉澤が振武寮についてかなり本質なところまで話していると思われるので、以下

に述べていきたい。まず、特攻隊員たちの帰還については「私は、特攻隊がみんな行ってみんな突っ込んでくれる前提で仕事をしていた。まさかそんなにたくさん帰ってくるとはゆめ考えなかった。帰ってきても『俺は途中で帰ってきた』ってみんなに言わない方がいい。だんだん人が増えて、三〇名、五〇名となるわけだから」と述べている。次に、振武寮の存在意義については「途中で命が惜しくなった者がいっぱい帰ってきている。それを入れたのがこの振武寮だ。結果的に隔離所になる。みんな死に行けというように精神的なものが多かった」と帰還者たちを端から臆病者と決めつけ、その精神を「叩き直していた」ことを認めている。

また、学徒兵に対してはかなり批判的な見方も際立っている。『年齢若くして参謀なんかになったため特攻隊員にならず、我々素人を特攻隊用に大学から引っぱって、筋が違うのではないか』という態度が、露骨には言わなくても、消えなかった。だから、これは悪口ではないけれど、法律とか政治を知り、人の命は地球より重いと分かってしまうと、死ぬのが怖くなるんです。それを世間常識のないうちから、徹底的にマインドコントロールして洗脳すれば、自然にそういう人間になってしまうのです」と当時の大学教育のあり方にまで批判の対象としているのである。ここで

史苑（第六八巻一号）

は、この戦争当時の軍国教育が戦後六〇年以上現在に至るまで問題視されてきたにもかかわらず、倉澤自身がむしろ自由教育を批判することで帰還特攻隊員たちを否定的に見ているという点に特徴がある。そんな倉澤にも戦死した特攻隊員たちに対する申し訳ないという気持ちはあるのだというが、実際振武寮内に収容されていた特攻隊員たちには「鬼参謀だ」と言われるほど恨みは根深いという。

その後、倉澤は終戦間際の七月一八日に第二六飛行団の参謀となり、那須野で終戦を迎えた。戦後は印刷会社勤務する一方で航空同人会や陸軍航空碑奉賛会の活動に大きく貢献していたようである。特に、航空碑奉賛会の方は事務局長を務めており、彼の仕事ぶりには目を見張るものがあったという。しかし、晩年は振武寮に関する多くの取材において言を左右していたことから、その評判はかなり悪くなってしまったようだ。彼は振武寮に関する真相の多くを抱えたまま二〇〇三年一〇月二九日に八六歳で亡くなったが、家族に特攻隊との関係を明かすことはなかったようだ。

(二) 第六航空軍司令官 菅原道大中将（陸士二一期→陸大三一期）

また、特攻隊を出撃させた立場から考える際、第六航

空軍の責任者だった菅原道大中將の存在にも焦点を当てていきたいと思う。彼はもともと歩兵出身であったが、一九二五年という早い段階で航空に転科、一九四四年七月に航空総監兼航空本部長となり、八月には教導航空軍司令官も兼ねている。やがて一二月末に教導航空軍が第六航空軍となると、菅原は第六航空軍司令官を専任で務めることとなった。そして、翌年四月に入って第六航空軍の総攻撃が始まると、知覧など最前線の基地に向いては、「お前たちはすでに神である。日本を救えるのはお前たちだけだ。お前たちだけを死なせはしない。最後の一機で俺が必ず行く」などという訓示して特攻隊員たちを送り出していた。この菅原の帰還特攻隊員たちに対する思いは以下のように述べられている。

某軍曹はまた帰って来た、エンジンの不調は完全に直ったがまた帰って来たと言ふような話が予の耳に入らぬでもなかった。予は不問に附した。之は不適格者だと云ふことは解る。然し特攻要員免除と云へば名与失墜当人を殺すことになる。

（中略）

士気振作上、軍紀肅正上甚だ生温い統率の仕方であると批判もあるだろうが、特攻だからと云って器材の不調

なのに遮二無二征けと云ふ訳には行かない。多小の不調を何人とがだすしながら行く老練さは彼等には望めない。たとい臆病が主因だとしても水かけ論に終はる。稀有の特例であるので真に臆病なら本人が居たたまらなくなつて他の理由でもつけて他隊配属になるだろう。軍司令官として真正面からの呼びかけは避くべきで攻撃集団長の意見に依つて処理すべきであると考へ敢えて無作為に終つた。この種のことで軍司令官として特に処理した覚えはない。

これによれば、菅原は帰還特攻隊員に関しては基本的にノータッチの姿勢を取っていたことになる。しかしながら、自身の日記を見ていくと、全く関与しなかつたわけではないように思える。というのも、前述した大貫らが帰還した際の「午後喜界ヶ島より引上げし大櫃中尉以下に訓示し……」という記述を始め、「〇九〇〇より一〇三〇に亘り、飛行機の故障等で引返し、司令部に集合しありし数十名の特攻隊員に対し訓話を為す」とか「特攻隊員の為、九州帝大助教の元寇の話あり」といったもののように、帰還特攻隊員と関わった形跡が見えるからだ。さらに、第六航空軍高級参謀鈴木京大佐（陸士三五期）の「特攻隊が喜界ヶ島に不時着するのを監視哨等の中には特攻隊が不時着する

のは計画的であると話していた<sup>42</sup>、第三〇戦闘飛行集団長三好康之少将（陸士三一期）の「戦争末期の強制徴集の特攻隊員中には空中輸送中或は攻撃発進途中故意に不時着して攻撃を回避したる者、或は試運転中故意に愛機に触れて自身を傷け攻撃を回避して軍法会議に付せられたるもの等卑劣漢その跡を絶たず」という証言からは、それぞれ何らかの制裁が軍規模で行われた可能性を示唆させる。

菅原はこの最終戦の際には指揮官特攻も自決もせず、生き残って慰霊事業を行っていくこととなった<sup>43</sup>。彼は一九四六年二月に九州で遺族弔問の旅を始め、世田谷観音と知覧にそれぞれ特攻平和観音像を奉安し、現在に続く年次法要や慰霊祭の礎をつくった<sup>44</sup>。そして、一九七八年三月には特攻慰霊顕彰会が設立され、その下で靖国神社での慰霊祭や特攻隊に関する刊行物の発刊が行われていくこととなる<sup>45</sup>。菅原自身は一九八三年一月二十九日に九五歳で亡くなるが、彼の慰霊事業は今に受け継がれているのである。

### (三) 当時の下士官の証言から<sup>47</sup>

なお、村木前掲書によれば、前述の大貫が第六航空軍の方針や振武寮に関して当時の振武寮の週番下士官から聞き出したという話が述べられている。そこではまず、米軍の喜界島上陸時に特攻隊員らが自決せずに捕虜となり、結

果的に敵国側に特攻作戦や本土作戦の内容が知れわたるという事態を防ぐために、軍司令部側は喜界島まで迎える飛行機を送ったということが記されている。よって、軍司令部側はいかなる犠牲を払っても島から連れ出すという覚悟で、「本土までの間で墜とされればそれでよし、万一帰還したらまた考える」ということにしたようだ。かくして軍は三度にわたって重爆を喜界島に送ることになったが、軍は最後の二機が戻ってくるやまた新たに会議を始めた。以下、週番下士官がこの時の会議の結論に関して述べた部分を要約していきたい。

一、代替機は与えない。故意の不時着、大切な飛行機の破損、自暴自棄による自爆、離着後の無人島などへの不時着逃亡の恐れがあるからである。よって、本土決戦の際の水際特攻作戦の先陣として送り出すのが上策である。

二、帰還した事実を軍機密とし、絶対口外してはならない。当人たちも絶対に原隊へ帰りたくないであろうし、その事実を極秘としておきたいであろう（当事者も同意）から転属先は考慮する。

三、振武寮の設営まで博多の旅館に宿泊させ、三日目に寮に移って二〇日間外部との接触（電話、通信文、

沖繩陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

（面会など）を一切禁止する。精神修養のため、毛筆で軍人勅諭の清書をくりかえし、栄養失調からの回復、皮膚病の治癒、不時着の際の怪我の回復を急がせる。

四、一九四五年七月初めには本土決戦の際の配置を決め、新しく編成された隊に各自ばらばらに転属させる。

これらは日程にズレはあるものの、大体が特攻隊員たちの証言通りになっているところから、かなり信憑性が高いものと考えてよさそうである。ここには当時の軍側の方針がそのまま表れているように思えてならない。

## 第五章 第三者の視点から

（一）第二二六振武隊 石川二郎少尉（特操二期）

振武隊には参謀たちや特攻隊員たち他に、日直士官と呼ばれる管理者も存在していた。毎日『振武寮日誌』にその日の収容者の名前や状況を記した後、夕方司令部へ報告するというのがその仕事である。石川は、損傷した飛行機の代機を受け取りに福岡の軍司令部まで赴いた際にその仕事を命じられたという。もともと石川は一九四五年五月六日

第二二六振武隊の隊員となっており、日直士官となつたのは佐賀県の屋形原に前進した七月のころのようだ。

彼は振武寮での特攻隊員たちの様子を「みな一日中部屋に閉じこもり、ひっそりしていた。たまに部屋の中から小声で何か歌っているのが聞こえてきた。生気のない顔で、魂が抜けたよう。これがあの特攻隊かとも悲しい限りだった」と述べている。また、『振武寮日誌』の中に友人の名を見つけ、戦後その友人に「お前振武寮におつただろう」と尋ねると、その友人は石川の方をじっと見つめているだけだったという。ここからは戦後になつても振武寮という言葉すら収容されていた特攻隊員たちにとつていかにタブーなものだったかが推測できる。

なお、石川がその時のことを記した「第二二六振武隊（龍虎隊）記録（二）」によれば、

### 一、振武寮日誌

七月五日〜一日、第六航空軍付属寮における日常記録。内容、石川個人に偏するため、いずれ余録として報告。

とされているが、この『振武寮日誌』がその後どうなつたかについては不明である。この後、第二二六振武隊は八月



一三日に知覧まで前進し、そこでそのまま終戦を迎えたようである。終戦後の石川は出版社に勤務しながら、特操二期生会に大きく貢献し、他の特攻隊員らとのやり取りも行っていたようだ。

## (二) 振武寮の周囲にいた人々

『西日本新聞』で連載された「振武寮」の中には、当時福岡女学院の中学一年を担任していたという女性教諭の証言も含まれている。それによれば、「校内に寝泊りしていた特攻隊員を生徒と慰問しました。学校の講堂で学芸会を開き日本舞踊を踊って、最後に『海ゆかば』を歌いました。涙を浮かべた特攻隊の方もいたと生徒は話していました」という。これは前述した大貫の手記とも一致することから、ここでの特攻隊員たちというのは振武寮に收容されていた特攻隊員たちのことではないかと考えられる。

また、この振武寮に関する記事には読者や関係者から多くの情報や意見も寄せられており、以下ではその中の二つにも触れていきたい。まず一つ目は、当時福岡女学院の中学三年生だった女性の話である。彼女は軍が使用するために寄宿舎の明け渡しを命じられ、その頃は学校横の民家に移っていたようである。「その隊員さんは出撃したけど、目的地に着けず帰って来たそうです。『戻ってきたらばく

の名札がなかった。死んだことになつとつたんよ』と寂しげに話したのが忘れられません」という彼女の証言からは、彼女が帰還特攻隊員の存在を知り、その帰還特攻隊員も自らが帰還者であることを明かしていたことが分かる。また、彼女は「隊員の皆さん、とても投げやりだったのが不思議でした。裏でこんな理不尽な扱いを受けていたと知り、その理由が今やっと分かりました」とも述べており、ただならぬ特攻隊員たちの様子に気づいていたことが分かる。

もう一つは、当時振武寮の向かいに住んでいたという男性のものである。「毎日校庭に出て、一人で軍人勸諭を暗唱する隊員がいた。日の丸の鉢巻を締め、それはもう悲しそうな顔をしていた」という彼の証言からは、とても出撃前の特攻隊員の姿について述べたものとは思えない。また、彼は「これまで表に出なかつたことだけでも、元特攻隊員たちの心の傷の深さが想像できる。だが特攻隊を賛美する風潮は当時の国民にもあった」とも述べているが、これは当時の国民心情を知る上で非常に重要な証言であるように思う。

## (三) 陸軍航空本部衛生技師の調査<sup>53</sup>

それから、特攻隊員の取り扱いに適正を期するという目的で、陸軍航空本部が五月下旬に航空心理研究者の望月衛

衛生技師を第六航空軍へ派遣し、特攻隊員の心理調査をさせていたという話もある。六月にこの調査報告が関係部隊に配布されたようなので、「隊員ニシテ攻撃ヲ忌避シ或ハ是レニ臆スル如キ者若干ヲ認ムルモ性格的劣格者タリト認メラルルモノヲ見ズ」という前提のもと、以下にその調査のうち帰還に該当する部分を要約していきたいと思う。

## 二 編成ヨリ出撃ニ至ル中間期ノ心理ニ関スルモノ

1 本期間が長期に及ぶと、不適切な処遇や思わぬつまづきにより、指導が困難になったり、抗命など犯罪に至ったりする危険性がある。なお、特攻隊の教育は技術中心で、技量不足による戦果への影響を誇張せず、理論は綿密に、実施要領は簡単にする必要がある。また、お説教のような精神教育、特に軍人の行うものは全く有害無益である。これらの対策としては編成から出撃までの期間短縮、内務の厳正化、お祭りの歓待の廃止、信仰対象の設定、出撃前の訓練の強化、隊員以外の指導者や世話係の設置を提案する。

2 基地への移動中に地方の子女との恋愛から自機を毀損した者がいた。対策としては、生理的欲求を金銭で解決できるような特殊慰安施設の設定が挙げられる。

## 三 攻撃直前及出撃後ニ於ケル心理ニ関スルモノ

### （中略）

2 確実な戦果を期待して「犬死」を惜しむあまり、引き返す場合が増えている。一旦引き返して再出撃する時には更に精神的負担が生じ、結果的に士気が下がる。

本調査は、振武寮のように「お説教のような精神教育」を行うことの必要性に関してははっきりと否定している。第六航空軍幕僚がこの結果をどこまで知っていたかは分からないが、菅原の日記の中には「望月教授「衛、航空本部の依託により特攻隊員の心理調査をおこなう。心理学者」より各地視察談を聴く」という件があることから、少なくとも菅原に関してはこの内容を知っていたのではないかと考えられる。この調査によって特攻帰還兵への対応が変わったかどうかは分からないが、少なくとも大貫らを振武寮に収容し、「お説教のような精神教育」を行っていたことは確かなようだ。

この調査の目的自体が「特攻隊員の取り扱いに適正を期する」と抽象的にしか分からないため、実際この調査が本土決戦の際の特攻隊を見越したものであったのか、それとも第六航空軍における振武寮の話が外部に漏れていたために

されたものだったのか、全くもって疑問の域を出ない。また、実際に現場の特攻隊員に手渡されたと考えられる冊子には「中途カラ還ラネバナラヌ時ハ、天候ガ悪ルクテ自信ガナイカ、目標ガ発見出来ナイ時等。落胆スルナ。犬死シテハナラヌ。小サナ感情ハ捨テロ。国体ノ護持ヲドウスル。部隊長ノ訓辭ヲ思ヒ出セ。ソシテ、明朗ニ潔ヨク還ツテ来<sup>55</sup>イ」という帰還を許す記述が含まれているが、これはこの調査と関係性を持つものなのであろうか。なぜ陸軍中央部がすでに沖繩作戦に見切りをつけていたこの時期にこのような調査を行う必要があったのかということも含め、今後改めて検証していく必要があるであろう。

それと、この調査の際、望月衛生技師は当時前線にいた飛行第六五戦隊長吉田穆少佐（航士五二期）から特攻隊について話を聞いていたようである。このことは戦後の吉田の証言から分かり、以下ではそれについて記していく。

私は特攻隊は駄目だと云った。士気が上らぬ。七〇キのうち六七キ落され船団上空に三キ行つた。

（中略）

中には調子が悪いと言って帰って来る。

↓幾度か帰って来て、遂に終戦まで生きのびた。

整備員が何処も悪いところがないのにと云って泣い

た。<sup>56</sup>

ここからは、もはや五月末においては最前線で特攻が機能していなかったという現実が見て取れる。菅原は五月二八日このような特攻隊の状況についても望月より伝えられたか分からないが、少なくとも現場にいた吉田はこの時点ですでに特攻に見切りをつけていたものと考えられる。

## おわりに

本論文では、特攻隊員と軍側、第三者という三つの視点から振武寮を見てきたが、ここにおいて改めて日本の軍隊における非人間性を感じさせる結果となったように思う。

まず、「第三章 特攻隊員側の視点から」では、特攻帰還者たちが軍上層部より精神的に追いつめられていく構図を示した。そして、彼らはこの後も一度特攻の任務に当たるという一連の流れについても触れていった。この時には「次の出撃では絶対に帰還はしない」という大貫の決意から、「特攻隊員たちにとにかく死んでもらおう」という軍側の意図通りと言えるかもしれない。しかし、戦争にあって最も重要なのは戦果である。そう考えた時に、戦果が考慮されず死だけが一人歩きしているところからは、特攻という戦術の問題だけでなく、戦争そのものを続けていくこ

との意味をも喪失していると言わざるを得ない。こうした点から特攻の実態が「人命の使い捨て」という一面を持っていたことは否定できないように思う。この点に関しては、撃墜されてパラシュートで落下中のパイロットや、特攻機に体当たりされた艦船の乗組員を少しでも多く救出しようとして尽力した米軍と対照的である。

そもそも、現場の特攻隊員たちの精神的負担はいったいどれほどのものであっただろうか。四月中旬あたりからは未帰還となった援護用の戦闘機がかなり多かつたというから、最前線の特攻隊員たちは戦況が全くよくなつてはいなかつたことにすでに気づいていたように思われる。先に出撃していった仲間たちによる特攻が大勢にほとんど影響を与えていないと分かれれば、もともと「軍人である以上、とにかく戦果を挙げることで戦況を少しでもよくしなければならぬ」と考えていた特攻隊員たちであつても気持ちの動揺があつたのではないかと考えられる。なお、今井が記しているように帰還特攻隊員のうち全員が振武寮に収容されたわけではない。少なくとも軍としては、振武寮に収容にする前に特攻隊員を福岡に送る必要があつた。では、どういう場合に福岡へ送られたかということになるが、どうやら複数で帰還する場合の方が福岡行きになりやすかつたよう<sup>⑤</sup>だ。

次に、「第四章 軍関係者側の視点から」では軍上層部の無責任さを改めて感じさせられた。特に、軍関係者の中で東條道明第一〇三隊長は「司令官をはじめ参謀たちは朝から酒ばかり飲んで、特攻隊員に発破をかけて鍛えなおすことしかやるのがなかつた」と振武寮の存在を認めるような発言をしているものの、直接の関係者である倉澤が振武寮で帰還特攻隊員たちを虐待した事実を認めようとしていない。軍側は特攻隊員に満足な飛行機を与えることができず、戦果確認機をつけるという約束も守れず、天候上無理な出撃命令を出したことすらあつたようだ。にもかかわらず、帰還者にはむしろ彼らの方にその責任を求めたのは、自分たちの責任をカモフラージュするためではないかと考えられる<sup>⑥</sup>。

そして、「第五章 第三者の視点から」では、実際に特攻隊員たちに会つた証言者たちは全員明らかに彼らの様子がおかしいことに気づいている点が特徴的である。石川の証言からは振武寮のタブー性が示されており、特攻隊員たちの証言に十分信憑性を持たせるものであると言えよう。それと、陸軍航空本部の行つた調査において「軍人の行う精神教育は有害無益である」と論じられているため、第六航空軍の行つたことは軍中央の方針に反するものであつた可能性もある。これに関しては、軍中央が特攻隊員たちを

どう見ていたかということも含め、今後検討すべき課題であるように思う。

なお、振武寮の実態解明については関係者の証言が最も重要な役割を果たしてきた。これは、振武寮のように戦史でほとんど取り上げられてこなかったものは証言に頼るしかないからである。それだけに、一人一人の視点から物事を見ていく際に、今後このオーラル・ヒストリーという手法をいかに取り込んでいくかこれが現在の歴史学に求められた課題であるように思う。また、戦争体験に関していえば、関係者はすでに八〇代と高齢化しており、特攻に関してもここ数年で関係者の数は急激に減っている。このため、戦争体験者への聞き取りは急務な問題なのである。

満州事変当時戦争に熱狂的だった日本国民は結局その後一五年にわたって戦争に巻き込まれ、当時の子どもたちは特攻隊員へとなっていった。この過ちを繰り返さないためにも、戦争の実態に関する証言や情報を次の世代に語り伝えていくことが我々の世代の課題であるように思う。

最後に、本研究では帰還特攻隊員たちの存在に目を向けていったため、従来の特攻に関する研究より一層日本軍における指導者側の無責任や残忍さを指摘することができたのではないかと考える。また、振武寮の実態から現場における特攻がいかに死を目的としたものであったかというこ

ともある程度示せたように思う。これらからは、特攻における卑劣な一面、さらには安易な特攻美化への危険性を改めて指摘することができた。しかしながら、陸軍中央とのつながりや海軍のケースまでは追いきれず、結果として第六航空軍の位置づけまで手を回すことすらできなかった。また、特攻に少なからず影響を与えたと思われる戦前教育との関係も指摘できずに終わった。よって、これらの点に関しては今後の研究についての課題となり、その解明が待たれることであろう。

## 註

(1) 今井健嗣は著書『元気で命中に参ります』(元就出版社、二〇〇四年)の中で生き残り特攻隊員を二つに分けて考察している。今井は待機特攻隊員を「生存者」、帰還特攻隊員を「生還者」としているものの、この表現では分かりにくいように感じたので、ここでは前述のように「待機者」や「帰還者」という言葉を使用することとした。

(2) 志賀直哉「特攻隊再教育」『朝日新聞』一九四五年一月一日。これに対し、坂口安吾は「特攻隊に捧ぐ」坂口安吾『坂口安吾全集一六』(筑摩書房、二〇〇〇年)所収で反論しているが、こちらの方も感情論となっており、特攻の実態を分析したものとは言えない。

(3) 例えば、防衛庁防衛研修所戦史室(編)『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』(朝雲新聞社、一九七〇年)

沖繩陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

六二七頁では、特攻は「不滅を信ずる日本国の重大危局に際会し、人柱となつてそれを擁護しようとする純情な忠誠心の発露」とされ、計画した軍上層部の責任は追及されてはいない。

(4) 本書はもともと『偕行』に掲載された「陸軍航空特攻史話」を加筆修正して出版されたものである。この中には一次史料が多く使用されており、その点に関して高く評価されている。しかし、その一方で「特攻隊員の選出は、志願によつたか、命令によつたかを一々史的に論証することは困難である。しかし、大局的にみるならば、多くの問題はあつたが、志願によつた、というべきであらう（五〇頁）」という記述のように、根拠を示さず軍指導者側の言い分を代弁しているような記述には疑問が残る。

(5) 例えば、今井前掲書では沖繩戦における陸軍航空特別攻撃隊を対象として出身別に遺書の内容を分析したり、軍用機を三段階に分けて考察したり、さらに送り出す側として女性たちの存在に焦点を当てたりと新しい視点がいくつも盛り込まれている。

(6) 防衛庁防衛研修所戦史室（編）前掲書三四二頁。

(7) 「」では軍法会議も開かれ、営倉（隊内にある罪人の拘留所）も設けられた（福岡女学院百年史編集委員会（編）『福岡女学院百年史』「非売品 一九八七年」二〇六頁）」というが、これが後に振武寮となつたのではないかと考えられる。

(8) これは、菅原道大第六航空軍司令官の日記で、「徒歩にて高女の方に初登庁。特攻隊の帰還者集合しあり、室広く従来に比しては格段の差ありて可」（菅原將軍の日記24）五月

六日条『偕行』平成七年一二月号、三四頁」と記されていることによる。

(9) 「映画「月光の夏」同じ体験、私も……」（朝日新聞）一九九三年九月二三日、毛利恒之氏より提供。「六航空司令部の一室には、エンジン不調等で知覧へ戻つて来た特攻隊員（ほとんどが将校）が五十名ぐらいた。いわば特攻落第生である。再出撃を希望して知覧へ行く者もいたが、私は二度とこれを望まなかつた（秋村友芳「特攻七七振武隊鎮魂賦」少飛会「陸軍少年飛行兵史」非売品、一九八三年）四八二頁）」という記述からは振武寮に収容され、中には再出撃のため前進していった者もいたことが分かる。実際、それは「振武隊異動通報（第三号）」靖部隊『振武隊編成表』（故・倉澤清忠氏所蔵、大貫健一郎氏より複写の複写提供）所収の中でも確認することができる。また、秋村の手記の中には、そこで電探の講義をやつていたという記述もあることから、実質上の「再教育」が行われていた可能性もある。なお、ここでいう「電探」とは「電波探知機」のことであると考えられる。

(10) 寺山欽造「寺山欽造回想」（防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料一陸空一日誌回想一八六、一九五九年）No.12・13。寺山は一九日から二五日にかけて第六航空軍司令部で戦闘概要の報告、特攻攻撃の要領、斬り込みに関する陣訓、各特攻隊長への体験談を行つていたようだ。ただし、「菅原將軍の日記26」「偕行」平成八年二月号の記述などと照らし合せてみると、寺山の回想には五日ほど記憶違いが生じている可能性がある。

(11) 「元特攻隊員座談会（抄）」読谷村史編集委員会（編）

『読谷村史 第五巻資料編四 戦時記録 下巻』（非売品、二〇〇四年）所収、一〇一六頁、金田新市「読谷山（北）飛行場に降り立った特攻隊員の体験」同一〇〇三頁。なお、菊田ら三名は沖繩の戦況報告をしたところ、箝口令が出て筑紫高女の教室に軟禁状態にされたのだという。

(12) 浜田斎「最後の手紙」靖国神社『英霊の言乃葉（一）』（靖国神社、一九九五年）所収、一二二頁。この第一七九振武隊は六月二二日に都城東飛行場から出撃していることから、この手紙が書かれたのはその数日前と考えられる。

(13) 振武寮に関しては、映画よりも小説の毛利恒之『月光の夏』（講談社、一九九五年）や戯曲の毛利恒之『挽夏』（映人社、一九九六年）に詳しい。

(14) 『特攻基地 知覧』は『知覧』の文庫版である。また、本書の記述においては疑問視する声も存在する。詳しくは、深堀道義『特攻の真実』（原書房、二〇〇一年）三二八―三四五頁、同著『特攻の総括』（原書房、二〇〇四年）二四一―二四三頁、佐藤早苗『特攻の町・知覧』（光人社、一九九七）二一八―二二二頁、今井前掲書三四五―三五五頁をそれぞれ参照のこと。これらはいずれも確かさとプライズムが直面する難問を露呈していると言えよう。なお、以下では同一著者による文献を複数挙げた場合、著者名と発行年のみを表示し、「高木前掲書（一九七三年）」のように記すこととした。

(15) 「振武寮 一・疑問」『西日本新聞』（一九九三年八月一日）、故・牧甫氏より提供。

(16) 今井前掲書三四二頁。

(17) 今井前掲書三四五頁。

(18) 以下は、片山啓二「突入特別攻撃隊員の心情を想う」昭和の杜友の会『The Times 昭和の杜』vol.27（非売品、二〇〇三年）所収や片山啓二「特攻の日日」特撰二期生会『学鷲の記録 積乱雲』（非売品、一九八二年）所収、六六―六九頁を中心に、高木前掲書（一九七三年）七四―一〇三頁、西日本新聞前掲記事、前掲NHK教育テレビ番組、片山氏本人への電話内容（二〇〇六年八月一六日）を参照した。なお、片山氏は体調不良のため、直接面会して証言を得ることはかなわなかった。そのため、電話での取材しかできず、録音等の史料化はできなかった点も付記しておく。

(19) この時出撃許可が出てそのまま知覧に残った同隊長桂正少尉（陸士五七期）ら三名は五月一日に特攻出撃して戦死している。

(20) 五月のある日、知覧から福岡まで飛行機をもらいに来ていたある特攻隊員（特撰一期）の妻が福岡の大盛館へやってきました。その隊員が追い返そうとすると、妻が夫のピストルを持ち出して自殺しようとしたため、激怒した隊員は「殺してやる」と軍刀を抜いた。騒ぎは何とか収まったものの、やがて駆け込んできた参謀たちは「風紀が乱れている。特攻隊、特攻隊とちやほやされ、いい気になっているのではないか」とさんざん叱咤し、翌日以降彼は謹慎を命じられて振武寮に収容された。実は、この妻は以前にも知覧で夫の出撃を妨害しようとして騒ぎを起こしている（高木前掲書「一九七三年」一八五―一九五頁）。

(21) ただし、片山らがいた頃の振武寮では外出は許可されており、大濠公園にボートを漕ぎに行ったこともあるという

沖繩陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

(二〇〇六年八月一六日の証言)。このことから、出撃した隊員としていない隊員の間で、軍側の対応は違っていたのではないかと考えられる。

(22) 片山は「振武隊異動通報（第一号）」靖部隊前掲史料では六月一日に明野教導飛行師団へ転属、陸軍航空本部人事班『決と号関係書類綴 其の一』（防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―本土周辺―一九三）一二一頁では六月七日に本土決戦のための特攻隊として教育を受けるようになったことがそれぞれ分かる。

(23) 以下は、大貫健一郎「『特攻涙あり』特操一期生会」『特操一期生史』（非売品、一九八九年）所収、一七五―一八三頁、大貫健一郎氏による講演「今だからこそ伝えたい、平和への思い」、『私の戦争体験』（一九九三年九月四日、毛利恒之氏より書き起こし提供）や、村木前掲書一六五―一八五頁、佐藤前掲書二九―一四八頁、前掲NHK教育テレビ番組、高木俊朗「特別攻撃隊の嘘と真実」文藝春秋（編）『完本・太平洋戦争（下）』（文藝春秋、一九九一年）所収、一五四―一六六頁、「三九年目の墓参」『読売新聞』（一九八三年八月三―一五日、大貫健一郎氏より提供）を参照した。

(24) 真面目に軍人勅諭を書いていた隊員もいた中、大貫自身は軍人勅諭の清書を命じられた際に「乗機を戴きたし」と書いて、倉澤参謀に「不忠者、軍人勅諭を何と心得ている」と竹刀で何十回も打たれて半殺しの目に遭っている。

(25) ただし、中には軍側の対応に反発する隊員もいた。第二振武隊中野友次郎少尉（幹候九期）は「卑怯者とは何だ」と少佐である倉澤参謀を思いきり殴り飛ばしたという（中野友次郎「特攻から終戦まで」幹候九期菊地会「操縦」

『続々航跡』「非売品、一九九三年」所収、二八三―二八五頁）。これは通常なら軍法会議となるが、ちょうどその時参謀室にいた第三〇戦闘飛行集団長青木武三少将（陸士二期）が「立派に戦って戻ってきたのに、私の編成した部下に何か文句があるのか」と倉澤を叱り、その場を収めたのだという。

(26) 孤野では燃料不足から一日数回プロペラを回すだけの生活だったが、それでも当時の大貫は「帰ってまた振武寮みたいなどころに入れられることのないよう、今度は伊勢湾に突っ込もうが、自爆しようが、絶対に生きて戻るまい」とすでに覚悟を決めていたという。

(27) 「振武寮の屈辱「忘れぬ」」『朝日新聞』（一九九三年九月五日）。

(28) 「敗戦『戦果より死』への特攻」『朝日新聞』（一九九五年一月一日）。

(29) 以下では、西日本新聞前掲記事（一九九三年八月一―一五日）、佐藤前掲書一四五―一五六頁、村木前掲書一三四―一四三頁、故・牧甫氏による講演「戦後六〇年」九州沖縄ふるさと探求講座第四弾「一日大学福岡塾」（二〇〇五年一月二〇日）を参照した。

(30) 第八飛行師団「特攻隊戦果調査表」（防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―本土周辺―三四）六頁によれば「牧少尉ハ確認機トシテ出撃セルモ未帰還（徳ノ島ニ在リ。五ノ二五判明）」とある。なお、牧は奄美大島から徳之島まで戻ったが、飛行場が使えず結局奄美大島経由で喜界島に移動した。また、福岡へ帰還した日の晩に牧は大盛館で両親と面会している。参謀側は当初牧が家に知らせたものと



考えていたようだが、実際には新聞に息子の出撃が掲載されていなかったことに疑問を持った両親の方が詳細を知りに第六航空軍司令部まで訪ねてきたのだという。この時、受付の下士官がうっかりその日の息子の帰還を知らせてしまったため、参謀は会わせざるをえなくなったというのが真相のようである。

(31) こうしてできた『月光の夏』の中で牧自身も石倉金吾少尉のモデルとなり、映画で振武寮のことが知られるようになる、牧は明るくなったのだという(毛利恒之『月光の海』講談社、二〇〇一―二八七頁)。

(32) 以下では、西日本新聞前掲記事(一九九三年八月一日―五日)、佐藤前掲書一六一―一六七頁、前掲NHK教育テレビ番組、「花だより」『偕行』平成一六年一月号、五一・五二頁を参照した。

(33) 佐藤前掲書一四四頁。

(34) 村木前掲書一三七・一三八頁。

(35) このような倉澤の姿勢について、大貫は『西日本新聞』「振武寮」の中に私たちを過酷に取り扱った参謀の言い訳がありました、見苦しいと思います。旧軍の亡霊をまだ引きずっているのではないかと考えております」と述べている(大貫氏前掲講演)。

(36) なお、ここで特攻帰還者たちの割合の目安として第六航空軍が編成した振武特攻隊の終戦時点での生存率を示すと、別表①のようになる。

(37) 実際、別表①を見て分かるように、一般に学徒と言われる幹候や特操出身者の終戦時生存率は三一・九%と比較的高くなっていることが分かる。しかしながら、予備将校で

あるはずの彼らが編成人員全体の四〇・〇%を占めているため、彼らの戦死者数二二九名は少飛出身者の二四七名に次いで多い数字であるという点も見落としてはならないであろう。ここから、学徒兵が第六航空軍の特攻作戦において欠くことのできない存在だったことは明らかである。なお、倉澤の学徒兵批判にはこれまで振武寮に関する証言者たちの多くが学徒出身だったこともあるかもしれない。

(38) 「八、特攻総ざらえ 四、帰還の頻度」菅原道大「特攻作戦の指揮に任じたる軍司令官としての回想」(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―文庫―委託―四八五、一九六九年)七九―八二頁。

(39) 「菅原將軍の日記25」五月二十八日条『偕行』平成八年一月号、二〇頁。なお、この大櫃とは第三〇振武隊長大櫃茂夫中尉(航士五六期)のことである。大櫃自身は振武寮を出た後浜松の飛行第三戦隊に転属、六月二十九日に所沢で第二四九神鷲隊長となっている(振武隊異動通報(第二号)靖部隊前掲史料)、第一航空軍「決と号飛行隊員名簿 其の一」(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―名簿―四四一―一五六頁)。結果的に再度の出撃の機会はなかったものの、『決と号人事二関スル書類綴』(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―名簿―一五〇)では振武隊所属の帰還特攻隊員たちが再び特攻隊員となった例が他に八件も確認できたことから、一度特攻隊員になると死ぬまで続くという一連の流れは存在していたのではないかと考えられる。

(40) 前掲菅原日記26、六月八日条。

(41) 前掲菅原日記26、六月十二日条。

表①:突入振武隊員における終戦時生存者の構成比率<sup>※1</sup>（靖部隊『振武隊編成表』より）

	士候+少候	幹候+特操	少 飛	その他下士官	合 計
編成人員（人）	66	351	326	134	877
編成比率 <sup>※2</sup>	7.5%	40.0%	37.2%	15.3%	100%
戦死者（人）	59	239	247	109	654
生存者（人） <sup>※3</sup>	7	112	79	25	223
生存率 <sup>※4</sup>	10.6%	31.9%	24.2%	18.7%	25.4%

沖繩陸軍特攻における「生」への一考察（加藤）

- ※1 ここでは突入時に第6航空軍が編成した振武特攻隊76隊のみを扱っているため、牧の誠第39飛行隊や寺山らの誠第41飛行隊など台湾の第8飛行師団編成の特攻隊、東日本を統括していた第1航空軍所属の神鷲特攻隊、また司振振武隊や第1特別振武隊といった特殊なものに関しては含んでいない。それと、自決など終戦直後に死亡した隊員については「生存者」の扱いとなっている。
- ※2 「士候」とは士官候補生のことで士官学校（正確には陸軍士官学校と陸軍航空士官学校の2つ）出身者、「少候」とは少尉候補生のことで下士官から士官学校などで教育を受けて将校になった者である。
- ※3 「幹候」とは幹部候補生、「特操」とは特別操縦見習士官（昭和18年にできた制度）のことで、いずれも大学や高専出身者などが中心であった。彼らはいわゆる「学徒兵」であり、将校といっても少尉任官時に予備役編入されていた。
- ※4 「少飛」とは少年飛行兵のことで、当時の陸軍航空の主力でもあった。この中には後に少候となった者もいたが、彼らについては表の中で「少候」という扱いにし、「少飛」の中には含まずという形を取った。
- ※5 =各編成人員/全編成人員 (= 877名)。
- ※6 ここでの「生存者」とは単純に編成人員から戦死者数を引いたものであり、片山のように未出撃の場合も含んでいる。
- ※7 =各生存者/各編成人員。

(42) 鈴木崇之『鈴木京大佐聴取記録』(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―日誌回想―七七九)。なお、鈴木は戦後名を「崇之」と改めている。

(43) 二一、今次大戦に於ける特攻隊運用の誤謬(一)―三好康之『特攻隊に対する所見』(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―文庫―柚―二七五、一九五六年) 六頁。

(44) 菅原の終戦時以降については深堀前掲書(二〇〇一年)に詳しい。

(45) ただ、付記しておかなければならないのは、菅原が「特攻隊は志願によるものだった」としていることである(菅原将軍の日記三〇「行脚所感条『偕行』平成八年六月号、二六・二七頁)。また、この点に関して深堀は「天皇に責任が及ぶことを恐れていたのではないか」と述べているが、菅原自身の弁明は現在のところ確認できない(深堀前掲書二〇〇一年) 九二頁)。

(46) 特攻慰霊顕彰会はこの後一九九三年に財団法人に認可され、現在は特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会となって活動している。なお、この会の発刊している(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会『特別攻撃隊』(非売品、一九九〇年)の戦没者名簿は、現在の特攻隊研究において最も信頼のおけるものの一つである。

(47) 以下は、村木前掲書二四一―二四五頁を参照した。

(48) 以下は、西日本新聞前掲記事(一九九三年八月一日―十五日)と『石川二郎中尉 江口佳津雄中佐 聴取記録』(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―日誌回想―七八五、一九七五年)、陸軍航空碑奉養会(編)『陸軍航空の鎮魂 総集編』(非売品、一九九三年) 一一八頁、窪川敏郎

『大空は父なりしか』(非売品、一九七九年) 三七九頁を参照した。なお、史料名では石川が中尉に昇進したことになっているが、実際彼が中尉になったことを確認することはできなかった。

(49) 「振武隊異動通報(第五号)」靖部隊前掲史料『振武隊編成表』にも、石川が飛行機を受領しに福岡まで来たことが記されている。なお、ここでは「市川二郎」となっているが、同史料「振武隊異動通報(第六号)」で「石川二郎」への訂正文が記されている。

(50) 「第二一六振武隊(龍虎隊) 記録(一)」石川・江口前掲史料所収。この「第二一六振武隊(龍虎隊) 記録(一)」は一九七四年一〇月五日に前もって書かれたものであり、当時の手帳より判読可能な部分を抄録したものであるという。また、この「余録」として報告されたものに関しては現在のところ確認できていない。

(51) 西日本新聞前掲記事(一九九三年八月一日)。

(52) 「歴史の闇に埋もれさせないで」『西日本新聞』(一九九三年八月一日、故・牧甫氏より提供)。

(53) 生田前掲書二〇九―二一三頁。ただし、原史料が見当たらなかったため、内容に関しては同書に依拠した。

(54) 前掲菅原日記25、五月二十八日条。

(55) 「ト号空中勤務必携」押尾一彦『特別攻撃隊の記録(陸軍編)』(光人社、二〇〇五年) 所収。

(56) 吉田穆『吉田少佐聴取記録』(防衛研究所戦史部所蔵、陸軍史料―陸空―日誌回想―九〇二)。

(57) 靖部隊前掲史料によれば、少なくとも福岡に戻された突入振武特攻隊員の数は八五名いることが分かる。ここでは

帰還したと思われる日付までしか分からないが、確実に単独で帰還したと考えられる者は一〇名のみである。よって、大櫃や片山の例を見ても、多くの隊員は複数で帰還したのではないかと考えられる。また、別表②ではサンプルの多い「幹候+特操」と「少飛」の数値ぐらいいしか信頼できないが、どうやら福岡に戻されるのに隊員の出身はあまり関係なかったようである。よって、秋村前掲手記の中の「ほとんどが将校」という記述は偶然だったものと考えられる。なお、高木前掲書（一九七三年）一四二・一四三頁によれば、高木と元第六航空軍参謀とのやり取りから、三度戻ってきた隊員は福岡まで戻すといったこともあったようだが、これ以上検証することはできなかった。

(58) 小川健次郎「出征 出動 別離」「語り継ごう元戦士たちの証言」刊行委員会(編)『語り継ごう 元戦士たちの証言』(リーブル出版、二〇〇五年)所収、四三六―四三八頁には、九州南端の基地である陸軍の特攻隊員が三度にわたる帰還をその都度責められていたことを面会に来た母親に打ち明けたという話も掲載されている。彼はこの時点ですでに「今度出撃したらもう生きて帰らない」と覚悟を決めており、この後戦死していったようだ。ここからは、振武寮と同じような実態が最前線の基地でも存在していたことが分かる。また、航空本部では回転しているプロペラという罪状で裁かれたという話もある(「特攻隊員が「特攻忌避」という罪状で裁かれた」という話もある(「特攻隊員の終戦について」下「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」会報「特攻」第五五号所収、一九頁)。彼は後悔の念が強く反省しているということや結婚したばかりであったことを考慮され、最も軽い懲役

三年という判決になったようだ。ここからは、とても特攻が志願だったと言いつれないことが分かる。

(59) 大貫が原隊復帰する際に「振武寮での件は一切他言を禁ず」と言われたのは、こうした理由からと考えられないだろうか。いずれにせよ、振武寮での出来事を秘密にしようとするからには何らかの理由があったはずである。

(本学会会員)

表②:福岡に戻された突入振武特攻隊員生存者(靖部隊『振武隊編成表』など参照)

	士候+少候	幹候+特操	少 飛	その他下士官	合 計
編成人員 (人)	66	351	326	134	877
生存者 (人)	7	112	79	25	223
最低 帰福者数 (人) <sup>※5</sup>	5	45	29	6	85
帰福率 <sup>※6</sup>	71.4%	40.2%	36.7%	24.0%	38.1%

※5 なお、ここでの「帰福」とは福岡に帰還することである。

※6 =最低帰福者数/生存者。

## “Survivors” of Kamikaze Pilots in Army’s Okinawa Campaign

by KATO Taku

史苑  
(第六八卷一號)

Although many researches on kamikaze attack have been carried out, some people regard the pilots’ deaths in the attack as venerable, and others do them as meaningless. I focused on the “survivors” of kamikaze pilots, not the dead. The dead have been mentioned more than survivors in previous researches. The survivors of kamikaze pilots can be divided into two groups. One are the pilots who were forced to land because of the engine trouble just after takeoff, and the other are those who did not take off because the war ended. Most of the survivors of kamikaze pilots belong to the latter group. In this research, I focused on the former group, because their experiences resemble those of the dead.

Especially, I focused on *Shimburyo* (振武寮) in Fukuoka, where the survivors of kamikaze pilots were insulted, ordered to copy or memorize *the Imperial Rescript to Soldiers and Sailors* (軍人勅諭), and told moral discourses by staff officers, which forced the survivors to die. So, some pilots committed suicide and others suffered mental illness.

As a result, I revealed that kamikaze attack forced the pilots to be killed and that, in the respect of making them throw their lives away, the utmost purpose of the attack was not “military results”, but death of the soldiers. Besides, the staff officers did not only confess that they badly treated the survivors of kamikaze, but also blame the failure of kamikaze attack on the survivors of kamikaze pilots.

Furthermore, I could refer to the actual conditions that 25.4% of the taking-off kamikaze pilots had survived at the end of the war, and that they had been forced to be kamikaze pilots again.